はじめに

この高校生シンポジウムのテーマになっている「文系・理系」とは、一般に何のことを指すのでしょうか。

【文系】　文科に属する系統。
【文科】　(1) 人文科学・社会科学に関する分野。また、大学などでもっぱらその分野を修める学部・学科。「―系」　(2) 文学部。文学科。

【人文科学】　政治・経済・社会・歴史・文芸など、広く文科系の学問の総称。狭義には、自然科学・社会科学に対して、哲学・言語・文芸・歴史などに関する学問の称。文化科学。

【理系】　理科の系統。理・工・農・医・薬などの学部を指す。
【理科】　(1) 学校教育で、自然界の事物および現象を学ぶ教科。(2) 自然科学の学問。また、大学などでそれを専攻する部門。理学部・工学部・農学部などの総称。また特に、理学部。「―系」

※引用元：『広辞苑』第五版

形式的な言葉の定義を見る限り、文系・理系は、それぞれの学問における研究対象によって分類されているようです。また教育現場においては、進路選択などのために、生徒・学生を文系と理系に分けて扱うことが多くあります。高校生の段階では、職業選択や大学受験のために文系・理系を選択するということをきっかけとして、文系・理系を意識するようになる人が多いのではないかと思います。

理系女性教育開発共同機構では「新たな理系教育のあり方を考え研究・実践していく」ということを目標としています。
私たちは形式的な言葉の定義ではなく、高校生自身が文系・理系をどのように捉えているのか、どのような理由で文系・理系を選択していくのかなどについて、生徒たちの意見を直接聞く必要があると考え、このシンポジウムを開催することにしました。

目次

チラシ・ポスター……1

各高校からの代表者による発表……5
　奈良女子大学附属中等教育学校 ……6
　プール学院高等学校 ……11
　四天王寺高等学校 ……14
　お茶の水女子大学附属高等学校 ……23

全体での意見交換……25

高校生の感想……39
　プール学院高等学校 ……40
　四天王寺高等学校 ……44
　奈良女子大学附属中等教育学校 ……48
　お茶の水女子大学附属高等学校 ……52

高校生シンポジウムを終えて……58

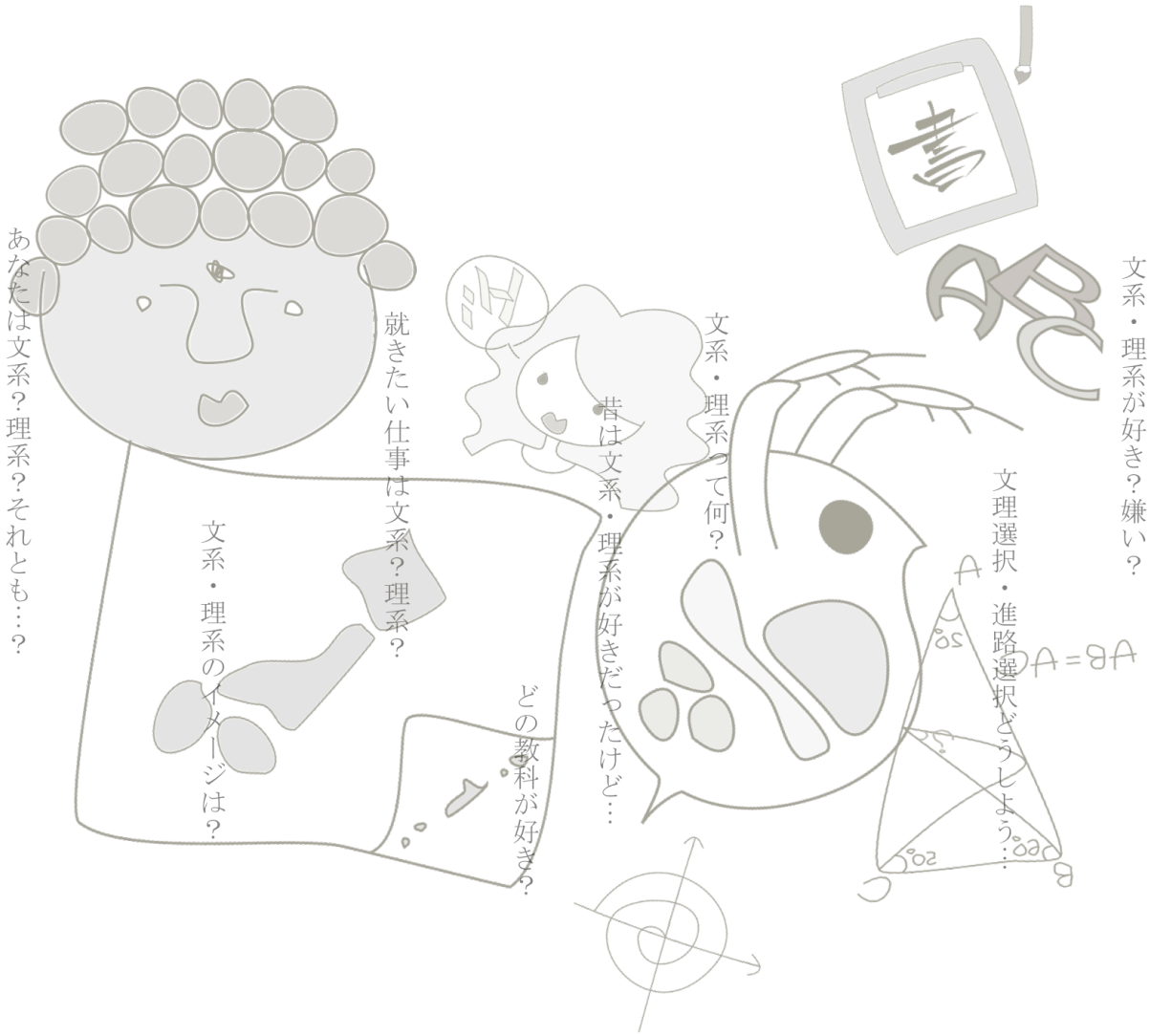
奈良女子大学・お茶の水女子大学　理系女性教育開発共同機構　主催

高校生シンポジウム

あなたにとって 文系とは・理系とは

~ステレオタイプとは違う！？みんなの現実と本音~

文理の選択は大学や将来の職業を決める時にも大きく関わってきます。みんなが文理をどのように捉えているのか・どのように文理を選択するのか・文理選択に関してどのような悩みを持っているのかなど、高校生たちに素直な気持ちを語り合ってもらいます。



2016 年 1 月 9 日
高校生シンポジウム
あなたにとって 文系とは・理系とは
~ステレオタイプとは違う!?みんなの現実と本音~

■■■　日時・場所　■■■

日時:　2016 年 1 月 9 日(土) 15:00-17:30

場所:　奈良女子大学 文学部 S 棟 S228 教室
　　お茶の水女子大学　共通講義棟 1 号館 107 室

■■■　プログラム　■■■

15:00-15:10　開会挨拶・シンポジウムの趣旨説明（小路田副学長）

15:10-16:10　各高校から代表者 1 名による発表
　　15:10-15:25　奈良女子大学附属中等教育学校
　　15:25-15:40　プール学院高等学校
　　15:40-15:55　四天王寺高等学校
　　15:55-16:10　お茶の水女子大学附属高等学校

16:10-16:20　休憩

16:20-17:25　全体での意見交換

17:25-17:30　まとめ・閉会挨拶

奈良女子大学　理系女性教育開発共同機構　主催

高校生シンポジウム

あなたにとって 文系とは・理系とは

~ステレオタイプとは違う！？みんなの現実と本音~

文理の選択は大学や将来の職業を決める時にも大きく関わってきます。みんなが文理をどのように捉えているのか・どのように文理を選択するのか・文理選択に関してどのような悩みを持っているのかなど、高校生たちに素直な気持ちを語り合ってもらいます。

日時：２０１６年１月９日（土）　15:00-17:30

場所：奈良女子大学　文学部Ｓ棟　S228 教室

プログラムの概要：

〇趣旨説明　15:00-15:10

〇高校生による発表　15:10-16:10,

- 奈良女子大学附属中等教育学校　15:10-15:25
- プール学院高等学校　15:25-15:40
- 四天王寺高等学校　15:40-15:55
- お茶の水女子大学附属高等学校　15:55-16:10
  （お茶高はTV会議システムで参加）

〇全体での意見交換　16:10-17:30

募集対象：中学生・高校生・教員

募集定員：２０名（要　申し込み）

参加費：無料

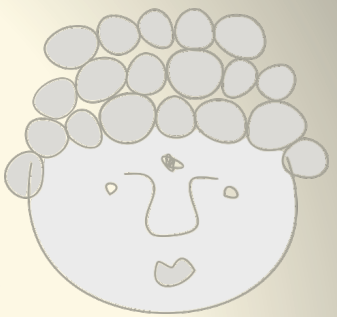
お申し込み・お問い合わせ先：理系女性教育開発共同機構

(MAIL:coreofstem@cc.nara-wu.ac.jp / TEL:0742-20-3266)

ホームページ　http://www.nara-wu.ac.jp/core/index.html

奈良女子大学・お茶の水女子大学 理系女性教育開発共同機構 主催

高校生シンポジウム



あなたにとって 文系とは・理系とは

~ステレオタイプとは違う!?みんなの現実と本音~

各高校からの代表者による発表

発表生徒：6 年（奈良女子大学附属中等教育学校）

今日は、私が歩んできた道のりとその時々で文理に関して思ったことを話そうと思います。

みなさんは文理のイメージといえば何を真っ先に思いつきますか？少し心の中で考えてみてください。職業との関係ですか？重視している教科の特徴ですか？考え方や物事のとらえ方についてですか？

私は職業との関係でした。その背景には両親が卒業した大学の学部と現在の仕事とに隔たりがあると日ごろから感じていたことにありました。母は文学部・英文学科を出ているのですが、今では英語を使う仕事に就いていないどころか英語をほとんど話せなくなっています。父も文系なのですが、同じような状況です。文系はこんなにも大学の専門と職業が結びついていないのかという疑問を日ごろから持っていました。そのような環境の中で過ごしてきて、私が文系・理系と職業との関係として、次のようなイメージを持ちました。

文系の仕事としては例えば営業や総務、法律関係、語学関係など仕事のジャンルや数としては多く、幅広い選択肢があるが、大学で学んだ専門知識をそのまま生かすことのできる仕事が半分くらいであり、その仕事に就けるのが「自分しかいない」というわけではない。また、得た知識というよりは自分の元来の性格が仕事に影響する面が大きいのではないかということです。

また、理系の仕事としては研究開発や管理、など専門知識を持っているからできる仕事が多く、専門知識を持つ人は限られてくるので、自分だからできる仕事に就ける気がするということです。

職業との関係というイメージは、文理の選択時にも影響していました。

私の学校では高校 1 年の 7 月に高校 2 年からの履修科目の選択の説明があります。そこから、文理の選択を 11 月の末までにしなければなりません。私は文系科目と理系科目では成績としては同じくらいであり、大学 4 年かけて勉強したいと思えるほど興味のある分野がなかったため、文理選択は悩みました。最終的に私は理系を選んだのですが、私が理系に進もうと思った理由が 3 つあります。一つ目は専門知識を生かして仕事をしたいと思っており、理系ならば大学で学ぶ専門知識と仕事とが結びついている分野が多いため、二つ目は人に直接かかわる仕事よりも、人を取り巻く物を通して間接的に人に関わる仕事がしたいと思っていたから。この基準を満たすものが文理で分かれているわけでは

ないですが、理系の方がどの分野に行ってもそういう仕事に就ける確率が高いと考えました。そして三つ目はこれから先、長く勉強し、意識してかかわっていくならどちらかといえば理系の方がいいと思ったことです。文系科目は趣味で勉強することもできるし、自分はそうするだろうと思ったのです。私は歴史が好きだったのですけれども、職業と結びつかないこと、わざわざ大学で学ばなくても自分から関わっていくだろうということから、進路にしたいとは思っていませんでした。

みなさんの中にも、これは好きだけど仕事にするというほどではなく、趣味にとどめておくといったものはあると思います。それは私と同じ理由かもしれないし、音楽やスポーツならば、ただ単に才能がないと考えているからということもあります。理由は何にせよ、考えてみれば思い当たるものは誰にでもあるはずです。

当時私が何を考えていたのか知りたいと思い、昔の資料を引っ張りだして読んで見るとこんなことが書いていました。

「文系は大学で学ぶことが一般教養として知らなければならないことの延長だから何なら自分でもできる」これが、文理を選んだ際の私の考えでした。

このように、３つの理由のうちの２つがそうであるように、職業との関係が進路を選ぶ大きな決め手になっていました。

こうして理系に進んだわけですが、その後 5 年（高校２年）になっても自分の進路を決めることが出来ず少し焦りを感じ始めていました。そこで私は、自分の興味のあることを見つけるため、文理関係なく、できるだけ多くの分野に出会い、触れてみることにしました。あまり興味や関心を払ってこなかった分野にもアンテナを広げることで、今まで知ることのなかった世界に出会うことが可能になり、その過程で思いがけない気付きがありました。例えば理系では、私は海に行ったことがなく、海について考えることもほとんどなかったのですが、偶然あるテレビ番組を見たことで、船や潜水艦に対する興味があることに気付き、工学が、将来学びたい分野の１つとまで考えるようになったのです。

また文系の科目では、倫理は高校１年の社会の科目選択際に全く選ぶつもりのなかった科目なのですが、高校２年になって倫理の授業を受けている人の話を聞くと、倫理は歴史で名を残すほどの哲学者がどのような考えを持っているか知ることができ、そのことで自分の考えを広げることができる教科だと感じ、また昔、職業の区別がなかった時代、偉大な哲学者と言われた人は、偉大な数

学者や物理学者であることが多く、そうした人の考えを知ることは化学の方面においても重要な意味を持つのではないかと考えたのをきっかけに、

授業を受けてみたいと思うようになりました。

その結果、私は興味のある分野を見つけ、進路もいくつかに絞ることが出来ました。この経験から私はある考えを持つようになりました。自分から行動し、いろんなものに触れ、自分で自分の興味を発見することによって自分の新たな、隠れた一面を見つけることができ、自分の志向を知ることができるのではないかということです。「自分で」というところがポイントなのだと思います。このことは嫌いな教科を好きになるための克服方法でもあると思います。ある教科が嫌いになる理由は、わからない・楽しくないなどの感情によるものです。「楽しくない」方を解決するのは人によって基準が異なるため、難しく、「わからない」方を解決するのが一般的な方法です。実際、私もわからないのが解消すると楽しく感じるようにもなり、モチベーションも上がりました。

……しかし、わからないことの解消を授業の中で行うことは難しく、個人の意思によるところが大きいため、教育の中で行うことは難しいかもしれません。そこで教育の中で行う方法としてはその教科に関連することで自分の興味のあることについて調べさせ、楽しさを一方的に伝えるのではなく、自分で発見させるという方法が提案できるのではと思っています。

話が少しそれてしまいましたが、自分の話に戻しますと、今まで知ることのなかった世界に出会うことが可能になり興味のある分野が増えたと言いました。先ほども少し触れたのですが私は昔から歴史が好きでその他の教科は好きでも嫌いでもなかったのですが、この頃世の中のほとんどは数学でできていると思うようになった時期がありました。私の学校では高校 2 年で、コロキウムという、各教科からの専門性を背景に持ちつつも、従来の教科の枠組みにとらわれない様々なテーマについて対話、討論によって探求する授業があり、自分で講座を選択するのですが、私は「文化としての数学を」という講座をとました。

この講座は、数学の有用性と数学そのものの美しさの両面を、結果だけでなく過程を学ぶことで人類の文化遺産としての数学に対する多面的な理解を深めることを目指す講座であり、その授業内で私はこんなことを書いていました。「人が自らもっている心や気持ちの動きを見るのも楽しいが、人間が自ら生み出した数学もまた、すばらしいものだと感じた。」今から考えるとこのような変化が生じたのは、教科の授業で学習するものとは違う視点から見たことがき

っかけだったのだろうと思います。この期間で文系だけでなく、理系の科目も好きなものが増えました。

高校 3 年になりクラスも文理に分かれるようになるとあることに気付くようになりました。文理を分けるからこそ考え方や物事への取り組み方などで違いが目立つということです。5 年のころは文理が分かれていてもクラスが一緒だったため、あまり考え方の違いを感じたり、溝ができたりすることはありませんでした。こうした違いが際立つのは文系の人と理系の人が分かれ、考え方の似たような人々がそれぞれで集まっていることによるものだということに気付いたのです。この気付きは、文理という分け方を改めて考えさせるきっかけにもなりました。

ここまでは私の経験と節目節目における文系理系に対する考え方の変遷をお話ししてきました。最後に今までの経験を基に文系理系を分ける教育制度についての私の考えを話したいと思います。高校段階では文理を分けるべきではないと主張する人もいますが、私は文理が分かれていてもいいのではないかと思うのです。文理選択を迫られることによって自分の進路を考え、文理が分けられていることによって自分は一つの専門分野を極めたいのか、文理にまたがって幅広い分野で学びたいのか気付くなど大学またその後の将来どうしたいのか自分で考えるきっかけになります。また、私が経験した様に、文理の違いというのを気付くきっかけにもなります。だから、高校を変えるというよりは大学をかえるべきなのではないかと思います。専門追求型の大学でも視点を自分の専門以外にも広げるため、自分の専攻が理系ならば文系の科目をとらなければいけないカリキュラムにする。また、そもそも文理を分けない学部を増やすなどをするべきなのではないかと思います。しかしながら、高等教育も現在のままでよいのかと問われればそうではないと思います。文理という分け方については否定しませんが、今の教育では受験競争の激化による高校と大学の分断という問題をはらんでいます。

今日話す内容を考えている時に、旧制高等学校に興味を持ち、調べたことがありました。

旧制高等学校はリベラルアーツの発想に基づく教育を主体に、受験に追われることのないモラトリアム性を持った教育機関だったそうです。その特徴を表した話があります。

「彼らが打ち込んだ学問や読書は、世俗的には決して“実用的ではない”が、

学問への畏敬の念を生み、大局観や広い視野を育み、一方では、エリートが陥りやすい「驕慢（きょうまん）」への自戒の心を養った。つまり、「教養」による人間形成である」

旧制高等学校と今の高校が対応しているわけではありませんし、現在の高校教育のすべてを旧制高等学校のようにするべきだとは思いません。しかし、高校においても大学での学びにつながり、どのような専門分野に進んでも通用する基盤を習得することができるような授業、すなわち、さまざまな事象に対する、従来の教科･科目の枠を超えた多角的なアプローチを実現するいわゆる「教養」を幅広く学ぶ授業を取り入れるべきなのではないかと思います。

発表生徒：１年（プール学院高等学校）

私達が考えてきた大きなテーマはこれです。
「みなさんは高校で文系と理系を分ける必要があると思いますか？」

この題材について、私達の、１００人以上の友達にアンケートを取ってみました。結果は、８０％の人が「文系と理系を分けたほうが良い」と答えました。「文系と理系を分けたほうが良い」と答えた人の意見を、３つほど紹介したいと思います。

１つ目は、大学受験の時に効率よく勉強ができるから。２つ目は、将来のことを早い時期から考えたいから。３つめは、自分に合った教科を勉強して、将来社会に出た時に役に立つように、すぐにでも勉強がしたいから。という意見がありました。一方で、「文系と理系を分ける必要はない」と答えた人の意見では、将来選択できる職業の幅が狭まるとか、自分が理系か文系かわからないのに決めても今後が不安、という意見がとても多かったです。

私たちはこのようなたくさんの意見を聞いて、自分たちなりに、ひとつのアイデアを出してみました。それは、「高校で２パターンの選択ができる」というアイデアです。

まず１パターン目は、自分が文系か理系かが決まっている人や、自分が就きたい職業がわかっている人は、今まで通り高校の時点で文系と理系を分ける。

２パターン目は、自分が理系文系のどっちか決まっていない人のために、高校を、自分が理系なのか文系なのかを決めるための３年間にする。という方法です。

あともうひとつ、アンケートをとっている中で出た意見なのですが、「理系に行きたいけど難しそうだから」だとか、「堅苦しそう」という理由で理系に行けない・文系にしておこうと言う友達がいました。

このようにアンケートでもあったのですが、お配りした資料の２番にも書いてありますが、理系のイメージは「論理的に物事を考える」「感情で動く人が少なそう」「難しい」「器用な人が多い」。研究などもたくさんあるので、器用な人が多いのではないかなという意見がありました。あとは「賢そう」だと

か、他に面白かったのは「理系の人は結婚できない人が多い」という意見がありました。皆さん思い当たる方はいませんか？？

文系のイメージは、「コミュニケーション力がある」だとか、「女子が多い」とか、理系とは対象的なものとして、「感情的に行動する」「結婚できる人が理系より多そう」という意見もたくさんありました。また、「数学がない」という意見もとても多かったです。

本当に文系に行くと数学がないのか？と思って現役の大学生に聞いてみました。

そうすると、大学で専攻する・勉強する内容によって、理系だけど文系的な内容を勉強することもあるし、文系だけど数学を勉強することもある、というお話を聞けました。

なので、このような高校生が思っているようなステレオタイプは、間違ったステレオタイプもたくさんあるのではないかと思いました。今聞いていて思った方も、たくさんいるのではないでしょうか。

このように、ステレオタイプがあるから自分たちが理系に行きづらいだとか、文系に行きづらいだとかがあると、自分の可能性を狭めてしまっていることもあるのではと思います。それを無くすことで広い視野が持てるようになり、たくさんのことが学べ、学力の向上にも繋がるのではないでしょうか？

これらのことを、現代海外の教育事情や海外の偉人を例にして挙げてみたいと思います。

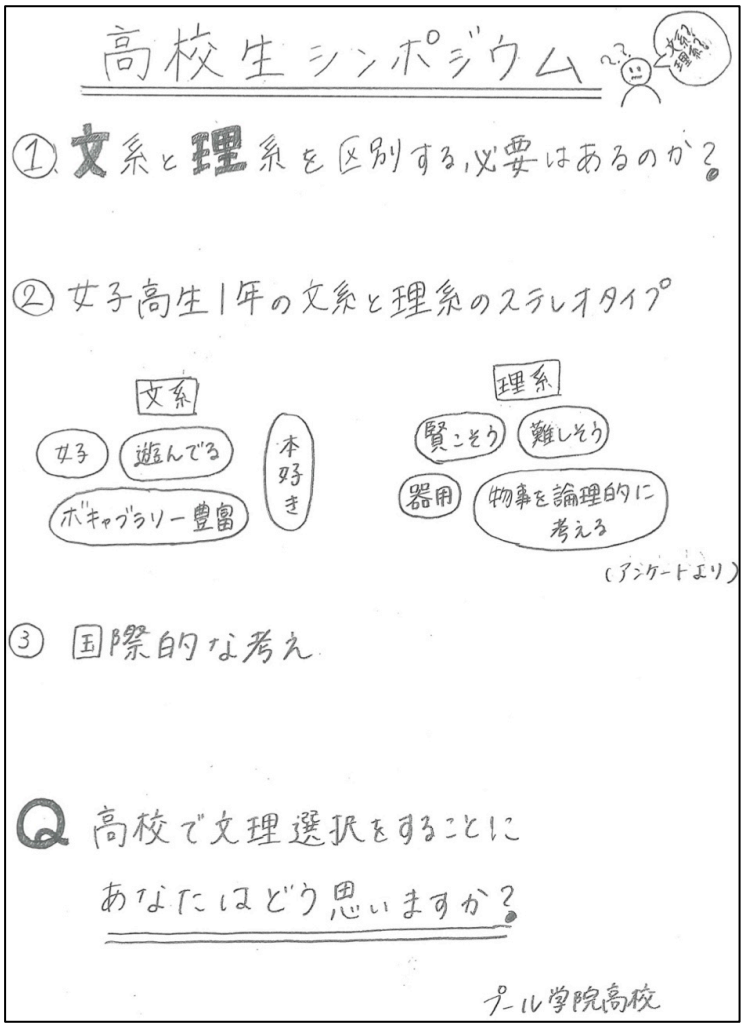
海外では大学で文系と理系を分けているところが多いみたいです。それどころかあまり理系と文系を区別するということを重視していないみたいです。あと、世界学力１位のフィンランドでは、教育方針で重視していることが、「飽くなき探究心と、尽きることのない独創性を生むこと」です。独創性というのは、模倣によらず独自の考えで物事を生み出すことです。

海外の偉人であるレオナルド・ダ・ヴィンチについて話してみたいと思います。

レオナルド・ダ・ヴィンチはルネサンス期を代表する、美術や解剖学で有名な人です。美術や解剖学ということで、レオナルド・ダ・ヴィンチは理系も文

系も関係なく手をつけていて、そのような人が後世に残るような業績を残しているのだなと、調べていて思いました。彼は幼少期には正当な教育を受けていなかったようです。おじいさんが自由奔放な人だったこともあり、彼自身も非常に自由奔放な性格であったようです。そのおかげか、飽くなき探究心と、尽きることのない独創性が産まれました。これは先程のフィンランドの話に共通する部分があるのではないかと思いました。

今私たちは、文系と理系を分けて勉強していますが、文系のみ・理系のみでも、飽くなき探究心と尽きることのない独創性は、生まれるとは思います。けれど、どちらかのみで生まれる探究心と独創性の幅よりも、理系と文系を合わせることで生まれる探究心と独創性の幅のほうがより広くなるのではないかと思います。



私は高校の部活でチェロを弾いているのですが、これも例に挙げてみると、ビブラートを、物理的に周波数を考えてどのぐらいで弾けば良い音色が出るのだろうとか、どんな気持ちで弾けばお客さんたちにも伝わって、良い音色・良い曲が作れるのだろう、という風に考えることも出来ます。こんなことでも、文系も理系もとても重要です。

そんなふうに考えると、文系・理系はどちらも不可欠なものなのではないかと思いました。

最後に、

みなさんは高校で文系と理系を分けることを、どう思いますか？

発表生徒：1 年（四天王寺高等学校）

私が提案したいのは、「ロールモデルとなる先輩に会いに行こう！目指すはスーパー文理融合型」です。

みなさんは文系にどんなイメージを持っていますか？人それぞれイメージは違うと思いますが、例えば人と接する仕事や会社の営業職が文系には多いというイメージがあるかもしれません。では次に理系のイメージはどうでしょうか？理系には医療関係の仕事や、白衣を着て実験をしているなどのイメージを持つ方が多いのではないでしょうか？

日本の多くの高校生は、高校１年生で文系にするか、理系にするかの選択を迫られます。それは高校２年生から文系クラスと理系クラスに分かれて授業を受けるからです。文系理系の選択は私達が大学を受ける際の受験科目に関わってくるので、私達の将来を決める上で大切な選択となります。

私は中学生の時から将来の夢は決めていたものの、それは漠然としたイメージでしかありませんでした。しかし高校生になって受験が近づいてくるにつれて、本当に自分が将来したいことは何なのだろうと考えるようになりました。

そこで私は昨年の夏、自分の進むべき道を明確にするために、大学のオープンキャンパスや、いろいろな教育関係の団体が主催するフォーラム、サマースクールに参加しました。その中で私は、たくさんの素晴らしい人達に出会うことが出来ました。この数々の出会いは、私にとって将来の進路を考える上でのロールモデルとして、具体的にどう考え、どう行動すれば良いのかということを示してくれました。そこで私が気づいたことを３点に分けてお話したいと思います。

まず１点目ですが、「私達が持つ文系・理系のイメージと文理選択の現状」についてお話します。私達が持つ文系・理系のイメージを友人たちと話し合ってみました。まず文系には比較的女性が、理系には男性が多いというイメージがありました。さらに文系の人は社交的でコミュニケーションスキルが高い、理系の人は失敗してもまたそれを成功の元と考えて粘り強く実験を繰り返す、というイメージがありました。文系・理系で思いつく仕事ですが、文系では、弁護士や通訳、公務員、またあらゆる仕事の営業職という意見が挙がりました。また理系の仕事として思いつくものは、やはり医療関係の仕事や研究職という

意見が挙がりました。しかし世の中には、これら以外にも素晴らしい仕事はたくさんあると思います。私たちにはまだまだ、文系・理系以前のお話で、知らない仕事がたくさんあると感じました。また理系・文系で必要な学力として、文系はやはり国語や英語などの語学、また理系は数学や理科が得意というイメージがありました。

文理選択においては、本来は、将来やりたいことや自分が本当に興味のある分野をじっくり考えて選ぶべきだとは思いますが、現状は自分の科目の得意・不得意で選ぶ人もいるようです。例えば数学が苦手だから文系に行くとか、国語などの文系科目が苦手だから理系に行く、という人もいるようです。

また、女性が進路を選ぶ上で重視することとして、資格取得があると思います。女性は、結婚や出産などのライフイベントで、どうしても仕事を休んだり、仕事をやめたりしなければならないことがあると思います。私の高校は女子校なのですが、理系に進む人も多く、国家資格を取ろうと意識している人もたくさんいます。その理由を聞いてみると、やはり安定が一番の理由でした。結婚したとしても、家庭や育児と仕事を両立させ、一生働くことが出来る仕事に就きたいと考えているのです。

次に２点目は、「文理選択は日本独特のもの？海外はどうだろうか？」ということについてお話します。私の海外の友人（アメリカ人・オーストラリア人・スペイン人・香港に住む日本の友人など）に、日本のような文系・理系の分け方はあるのか？ということを聞いてみました。すると友人たちの国では、日本のように文系・理系と、２つにカテゴライズされることは無い、ということでした。またアメリカに留学している日本人の友人によると、アメリカには色々な種類の大学があり、大学に入るまで専攻を決めなくても良いという所さえあるようです。彼らの通う高校では、必須科目の他にも自分の興味のある分野を自由に選択することができ、授業科目もとても多く、細かく分かれていて、自分がどんな分野に興味があるのかを、実際に授業を受けて体感することが出来るようです。これらは私の友人が実際に受けている授業の一例（Education・Computer Science・Classical Mediterranean・Technology Design）なのですが、もちろん日本でいうところの、文系・理系の両方の分野にまたがる科目を選択することも可能だということです。

これを聞いて私は、自分の興味がどこにあるのか、自分にどんな分野が向い

ているのかを高校の段階でじっくり考えることが出来る彼らが、正直うらやましいと思いました。それによって自分も気づいていない自分の可能性に気付くことが出来るかもしれないからです。

彼らに、日本の文系・理系という分け方について説明すると、私は質問攻めにあいました。なぜ、そんな２つのカテゴリーに分けているのか？たった１６歳で２つのどちらかを選ばなければならないのか？もし興味が変わったらどうするのか？などと、矢継ぎ早に聞かれました。

将来自分が志望する大学の入試科目を高校１年生の段階で決めることについては、制度上、時間的にも仕方のないことかもしれませんが、早い時期に自分の進路を限定することにならないのかな、と思いました。当たり前のことではありますが、大学入試制度に合わせて高校の教育カリキュラムが編成されています。2020 年頃に大学入試制度改革が行われるそうです。大学入試制度が変われば、自ずと高校の教育カリキュラムも変わってくることと思います。

海外の友人によると、海外では授業までに自分の意見をまとめていき、授業はあくまで生徒同士の意見交換の場所であるようです。先生方は、議論が滞った際に助言をして議論を促す役割をしてくださるそうです。私も、分からない問題を友人に聞いた時に、友人はまた自分とは違う視点を持っていて、お互いの考えを共有することで、結局２人ともその問題に対する理解が深まるということがあります。私は理系志望なので理系科目についていうと、私の学校では物理の先生が「アクティブ・ラーニング」といって、生徒が主体的に考えて学ぶ時間を作ってくださったりもしています。教科書で基本的な知識を入れることを前提としながらも、どうしてそうなるのかということを自分たちで考えて話し合うという作業をすることで、より理解が深まるからです。アクティブ・ラーニングは自分で創造的に勉強することが出来るのでとても楽しいです。

３点目は、「ロールモデル・お手本となる先輩に会いに行こう」という話です。ロールモデルとは、自分にとって具体的な行動や考え方の模範となる人のことです。夏からずっと続けている自分の進路探しの中で、年末に参加したシンポジウムも、すごく印象的でした。文系や理系の女性の研究者の方のお話を、直接お聞きすることが出来る機会でした。将来私は理系の研究者になりたいのですが、どのような流れで先輩方が頑張ってこられたのか、ということを知り

たくて参加しました。目の前でいきいきと研究や仕事の面白さについてお話されているのを拝見し、自分の研究で社会に貢献することが出来たらどんなに素晴らしいだろう、と思いました。ある理系の研究者の方は、研究の内容をとてもわかり易く私たちに説明して下さいました。研究は英語でも発表されますし、文系・理系のどちらの要素も兼ね備えたハイブリッド型と言いますか、スーパー文理融合型の素晴らしい方々でした。現代ではインターネットの普及により、あらゆる分野において急速にグローバル化が進んでいます。再生医療やロボット技術など、どんどん科学技術が発達していて、社会はめまぐるしく変化しています。誰もが日常的に科学技術の恩恵を受けている今、文系・理系にかかわらず、最低限の科学技術の知識を、みんなが持ち合わせていないといけない時代だと思います。

文系・理系と分けるのではなく、そのどちらの力も伸ばし、社会で活躍されている先輩方をロールモデルに自らの進路を考えると良いと思います。

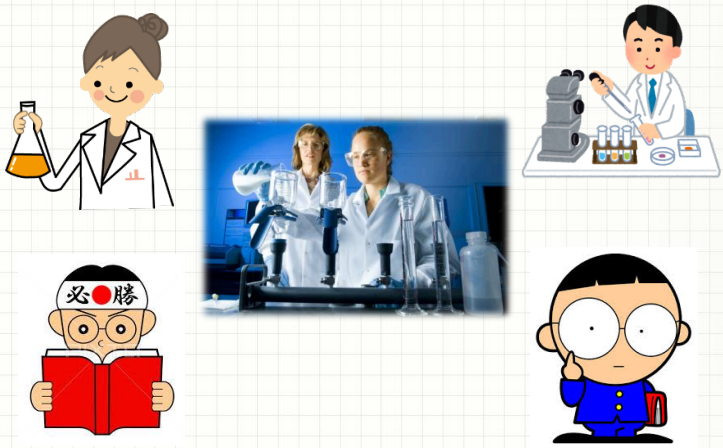
ロールモデルとなる先輩に会いに行こう！

目指すはスーパー文理融合型

四天王寺高校1年
2016年1月9日

文系のイメージ

理系のイメージ



日本の多くの高校生は
高１で選択を迫られる

文系? or 理系?

たくさんの人に出会い

いろいろな考え方を知る

行動力

計画力

前向きな発想

複数の分野で活躍

私が気づいたこと

1. 文系・理系のイメージって？
2. 文理選択は日本独特のもの？海外は？
3. ロールモデルとなる先輩に会おう！

私たちが持つ文系・理系のイメージ

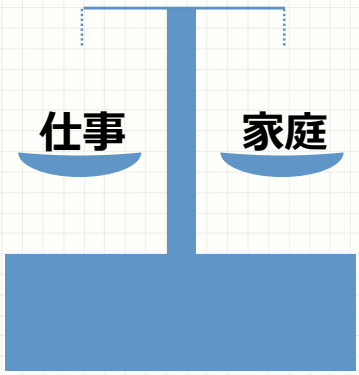
＜文系＞
- 社交的
- コミュニケーション上手

弁護士・通訳
公務員・営業職
語学に強い

＜理系＞
- 粘り強い
- 白衣にフラスコ実験
- 男子が多い

医療関係
研究者

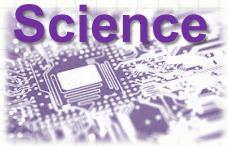
両立を目指して資格取得



文理選択は日本独特のもの？
海外は？

Education

Computer Science



Technology Design

Classical Mediterranean

授業＝知識をアウトプットする場

ロールモデル

自分にとって具体的な行動や
考え方の模範となる人物のこと

スーパー文理
融合型

ご清聴 有難うございました。

発表生徒：１年　（お茶の水女子大学附属高等学校）

最初にお茶高のカリキュラムから説明したいと思います。

お茶高のカリキュラムは少し特徴的で、１・２年生で必修科目として、文理科目をすべて行うことになっています。そして高校３年生になった時に、自分の進路にあった科目を選択し受講します。つまりお茶高では明確な文理選択が無いと言ってもいいでしょう。

そこで、文理選択についてお茶高の１年生７２人にアンケートを取ってみました。

まず、文系・理系のどちらに進むか考えていますか？という問いに対して、文系に進見たいと考えている人が１９人、理系に進みたいと考えている人が２５人、まだ決まっていないという人が２８人でした。

また、アンケートで不安に思っていることを聞いてみた結果、お茶高は３年生になってから文理選択を行うので、決める時期が分からない、いつ文理選択をすれば良いのかが分からないという不安が目立ちました。そのほかには、好きと得意が一致しない、就職に関わってくる、自分に合っているか分からない、後悔したくない、部分的に苦手な科目がある、という不安があがりました。

文系・理系のイメージも、今日いるメンバーで話し合い、アンケートも取ってみました。文系のイメージは、一般職、対して理系は専門職に就職しそうで、理系の方が就職に有利などのイメージがあります。また、文系は自由が多そうで、それに対して理系は実験とかが多くて忙しそうというイメージがあるようです。他にも色々なイメージがあがりました。

これからの社会では、文系理系にとらわれない見方をすることがやはり必要になってくると感じました。よって、文理融合型人材が、これからの社会のニーズに適しているのではないか、これが私達の学校の結論です。私達の学校は、文理選択が３年生までありません。それにより、文理という枠にとらわれることなく幅広い教養を学ぶことが出来るのではないでしょうか？

ここからは、私がこのシンポジウムを通して学んだこと、考えたことについて発表していきます。

まず、文系・理系で職業を分けることは本当に可能なのか？これが、私は一番疑問に感じました。私の父・私の母は、どちらも専門学校出身です。文系・理系で分かれていませんでした。そんな父・母がしっかりと働いているのを見て、本当に文系・理系だけで職業を決めて良いのか、それが疑問に感じました。

また、塾で受験前の先輩に意見を聞いてみました。先輩は高校１年生の時に、理系が苦手だったので文系を志望し、文系の授業を学校で受けていました。しかし３年生になってやりたい仕事が見つかったので、受験生である３年生の間に必死に理系の科目を勉強し、結果、第一志望に合格しました。これを聞いて、やはり高校１年生という早い段階で文系・理系を決めてしまうのは、後々のリスクに繋がるのではないかと感じました。得意・不得意で、職業や学部を自ら高校１年生という早い段階で遮断してしまうと、本当にやりたいことが見つかった時にすごく苦労するし、もったいないのではないか？と感じます。なので、私はこの学校の文理融合型人材になるための、１・２年生では明確な文理選択をしないという教育方法に賛成します。

みなさんはどうでしょうか？文系・理系を本当に１年生の段階から決めて良いのでしょうか？そうすることで、後々本当にやりたい職業が見つかった時、後悔しませんか？私はこの後のディスカッションで、その１点についてみなさんの意見を聞けたらと思います。

全体での意見交換

司会

「まずは各高校から代表者の方に発表していただいた内容に対して、会場のみなさまから質問やご意見等があれば伺いたいと思います。」

四天王寺高等学校からお茶の水女子大学附属高校に

Q「最後のまとめのところで、文理にとらわれない見方がこれからは必要になってくるとおっしゃっていましたが、その理由と、具体的にどういう時にそう思うのかを知りたいです。」

A「まず一つのことを考えるにあたって文系的な見方や理系的な見方のどちらかしか出来なかったら、見えてこないことがあると思います。例えば環境問題についてでも、自然学とか社会学とかいろんな見方ができると思います。その中で、それぞれがそれぞれの見方で研究するだけではなくて、どちらの見方でも研究することで見えることがあるのではないか思うので、私の意見ですが、両方の知識を持った上で研究することで出来ることがあると思ったので、そのように発表しました。」

お茶の水女子大学附属高校からプール学院高等学校に

Q「プール学院高校さんから、文系・理系を分けるコースと、（文系・理系をまだ決めることが出来ていない人のために）分けずに３年間将来について考える様にするコースという２つの案が挙げられたと思うのですが、そうすると、高校３年間将来について考える人達にとって、大学受験が不利になってしまうのではないかと思いました。私の考え方としては、仮にそのような高校の改革が行われたとすると、それに沿って大学受験についても改革を行う必要があると思うのですが、（プール学院高校さんは、）この高校３年間を将来について考える様にするコースを選ぶ人達の、大学受験に対する不安を消すために何か対策は考えられていますか？」

A「対策というわけではありませんが、日本の大学制度から考えるとこのコースには無駄な部分があるかもしれませんが、海外の大学や、大学進学を考えずに他の進路を選ぼうとしている人達にとっては有意義な時間を過ごせるのではないかと思います。」

A「文系と理系をあえて選ばない人達のコースを作ることで、３年間で教養に関する勉強とか、自分のやりたいこと・興味のあることを勉強できれば良いの

ではないかと思います。文系と理系の２つの選択肢しかなくて決まった教科しか勉強できないよりも、自分のやりたい教科とかを勉強する方が人間性を高めることにつながるのではないかなと思います。」

司会から会場全体に

「今のお話の中で、高校３年間を将来について考える様にするコースを選ぶ人達のために大学受験についても（この高校の改革に沿って）改革を行う必要があるという意見があったと思います。この会場におられる大学の先生がたにそのことについて伺ってみたいのですが、実際に大学でそのような話が出ることがありますか？そのこと、というのは、高校生の段階で文理を決めてしまわないというような人達の進路に対応出来るような受験制度、のようなことについて、何か話が出るようなことはありますか？」

小路田副学長

「その前にみなさんに聞きたいのですが、２つの高校が海外の事情というものを紹介してくれましたよね？日本とはぜんぜん違う、文系・理系に分けるようなこともしていないし、勉強の中身も非常に多様であるということでしたが、それを聞いて、羨ましい！と思う人はどれ位いますか？手を挙げてもらえますか？」

（学校によって大きく偏りがあるが、半数以上が手を上げた）

「やはり多いですね。日本ではこれから５年後に大学入試が変わると言われていますが、どのように変えるのかという部分は、多分どこの大学でも煮詰まっている状態が続いていると思います。」

雲島先生

Q「今の話を聞いていて逆に皆さんに質問をしたのですが、みなさんはどんな大学受験だったら良いと思いますか？こんな受験にして欲しい！というような意見を聞かせてください。例えばペーパーじゃない試験が良いとか、自分が好きな科目１つだけで受験したいとか、センター試験を無くして欲しい、というような意見はありますか？」

お茶の水女子大学附属高校

A「私の場合、もちろん基礎学力も必要だとは思いますが、高校時代に何をしたのかというポートフォリオをみんながつければいいのかなと思っています。留学も期間だけで見るのではなく、そこでどのようなことを学んだのかを教師に対してプレゼンする機会があれば良いなと思います。AO 入試だけじゃなくて、すべての入試で自分のポートフォリオを提出するとゆう制度になると、大学もその人がどんな人材かということが分かると思います。例えばすごく学力は高くても校風にはそぐわない人もいると思うので、そのような制度があればいいのではないかと考えます。」

お茶の水女子大学附属高校

A「高校でのその人の内申やポートフォリオのように、高校時代に何をしてきて何を学んだのかを重視してくれたら、高校生活がもっと充実して、受験勉強以外にもいろいろな行動を起こせるのではないかと思います。」

A「受験についてですが、私は教育について学びたい・学べる大学に行きたいと思っています。国語とか社会とかの文系科目を専攻して教育の道を目指したいと思っているのですが、その際に、数学の微分とか積分とか、理科のやたら難しい化学の式とか、そんなものが将来役に立つことがあるのかな？と考えました。その時に、私は「必要ない」という結論に行き着いてしまったので、将来的には自分が進みたいと思う道に沿った教科について、受験の科目を選べるようになったら良いなと思います。」

A「今は受験が机上の勉強面だけで測られているような気がします。友達からも「この教科は受験に必要ないから勉強しなくても良い」という声をよく聞きます。これまでの皆さんのお話の、総合力・多角的に物事を見る力がこれから必要だというようなお話を聞いて思ったことなのですが、もちろんどれだけ勉強をしてどれだけ努力が出来たかという面を評価するという今のテストの形も良いとは思うのですが、ただそれだけではなくて、その人がどれだけ自主的に・独創的に勉強してきたのか・勉強する意欲があるのかというところも含めて判断していただけたら良いなと思います。あと、その大学の特徴となる、その大学で出来る学びと、その人のやりたいこと・学びたいことが

合っているのかということで判断していただけたら良いな、と思いました。」

司会から会場全体に

Q「また、私から皆さんにお聞きします。皆さんの中にもこれまでに何らかの形で文系・理系の選択をする機会があったという人はおられると思います。その選び方は、好きな教科や嫌いな教科で選んだり、職業を考えて判断したり様々だとは思いますが、みなさんは、自分がした文理選択に完全に納得できていますか？完全に納得できている、という方は手を挙げてみて下さい。」

（ここでも学校ごとに大きく偏っていたが、全体としては約半数が手を挙げた）

「ではそれ以外の人は、どこか納得できていない部分がある、ということですね。どのようなところが納得出来ないのか、具体的に教えていただきたいです。」

プール学院高等学校

A「私は文理選択では理系を選びました。点数はそんなに良くはないのですが、ただ数学が好き・理科が好きだという理由で理系を選びました。けど自分の性格から将来の仕事について考えると、文系の仕事の方が合っていると思うことが多いので、将来は文系の仕事につきたいなと思っています。でも大学受験を考えた時に、暗記が苦手なので、好きな理系を勉強して受験に望んだほうが偏差値を上がるのかなと思って理系を選びました。なりたい職業は理系じゃないのに理系を選択したので、納得できていない部分があります。」

奈良女子大学附属中等教育学校

「私は、文系・理系というよりは、「学ぶ内容」って一体何なのか？としばらく考えた時期がありました。私は学ぶことそのものは目的では無いのではないかと考えています。今、現状としては最初から文系・理系で分けられてしまっているという状況ですが、学ぶことを通してその学んだことを実際に将来にどう活かして行くのかということを考えて、その中で文系か理系かという判断も出てくるのだと思います。例えばお金を稼いだり、社会に貢献したりという目的を達成するために、文系・理系のどちらの教科を勉強して、知識を身につけるのか。そこの判断をすることが、文系・理系を選択するということだと考えています。では、それをどのように選択するのかというと、やはりいろんな

ことに触れて、何を学んだら楽しいのか・自分が積極的に学べることは一体何なのか、ということを考えていって学ぶことを決め、そして学んだ知識を次は実際に何に活かしていくのかという目的を考える必要があると思います。その目的を考える力というのもまた大切だと思います。それはもしかしたら大学だけではなくて高校教育においても必要なことなのではないかなと思います。だから、すぐに文系・理系を分けてしまって知識だけをただ詰め込んで大学受験のために行う高校教育ではなくて、何をしなければならないのかを見つける力をつけるような高校教育にしていくべきではないかと考えています。」

お茶の水女子大学附属高校

「お金を稼ぐとか社会に貢献する、ということが意見の中にありましたが、例えば芸術家の人達は社会に貢献するということをそんなに考えているわけではないと思います。将来、社会に貢献することも大切なことだとは思うし、お金を稼がないと人生どうなるか分からないからそれも大切なことだとは思いますが、必ずしもお金を稼ぐことと社会に貢献することが、文理を分けることと関係するわけでは無いのではないかなと思いました。私は、自分がやりたいことで文理を分ける人もいるのかなと思いました。」

奈良女子大学附属中等教育学校

「確かにその通りだと思います。私自身は、自分が生きていくため、あと社会に貢献できたら良いなという思いがあるのでその２つを例に出しました。確かに何を学びたいかということを基準にすることもあるとは思います。ただ、私が一番言いたかったのは、学ぶことが目的ではない、ということでした。学んだ先に何を描くかということを、ちゃんと自分でビジョンを持って学ぶということが重要なのではないかと考えています。私は学ぶことが目的ではなくて、その先に何を描くかということを重要視した考え方が必要ではないかと思っています。という内容が、私が伝えたかったことです。」

小路田副学長

「今の議論は面白いと思います。いま、みなさんは高校生ですよね？大学で教えていて一番気になるのは就職活動です。日本の大学では３回生・４回生が就職のために必死になります。高校生には大学に入るために教育があって、大

学生には就職するために教育がある。必ず次の目的のために教育があるという形になっています。それで本当に良いのかな？と感じます。以前ヨーロッパから学生たちが来た時に、彼らは基本的に卒業するまでは「学生」として毎日を送り、就職については卒業してから考えるという話を聞いて、一体どちらの方が豊かなのかなと思いました。だから、いま奈良女の方がおっしゃっていた、「目的のために学ぶ」という意見と、お茶高の方がおっしゃっていた、「学ぶために学ぶ」という２つの意見は、興味深いテーマだなと思いました。」

お茶の水女子大学附属高校

A「私は将来小学校の教員になりたくて、夏休みにもそのために大学のオープンキャンパスに行き、算数とか国語とか専門教科のところを見学してきました。しかしその後、心理の方にも興味を持ちました。でも心理って文系・理系のどっちだろう？と思ったままこの夏休みは終わりました。この前、お茶大でキャリアガイダンスという大学の先生のお話を伺う機会があって、心理は文系でもあるし理系の統計学も使うので、文理のどちらも大切な知識だから、「文系・理系」にとらわれない方が良いというお話を聞きました。だから文系・理系の選択は、私にはまだ難しいなと思っています。」

司会から会場全体に

Q「最初に発表していただいた内容の中に、高校１年生で文理を分ける高校が多いというお話がありました。これはすごく早い時期に文理を分けることになってしまうから危険だ、という意見もありました。皆さんは、そのことについて何か意見はありますか？結果的に文理を分けてしまうとしても、３年間を将来について考える期間にすればいいのではという意見もあったと思うのですが、皆さんはどんな時期に分けるのが良いと思いますか？」

お茶の水女子大学附属高校

A「先ほどの発表でもお話したと思いますが、お茶高では高校３年生まで、高校３年生でもあまり文理は分けられてはいないのですが、友人からの話を聞くと、多くの高校は高校２年生にはすでに文理の選択やクラスが分かれているようです。私自身まだ文系の学部に進むのか理系の学部に進むのかは決めていないので、今の段階で文理を決めてしまうと後々自分の選択によって後悔

することがあるかもしれません。ただ日本の大学制度では文系・理系は分かれているので、高校３年生になって大学受験を考えなければならない段階になると、文理選択をしなければならない、したほうが良いのかなということを考えました。」

お茶の水女子大学附属高校

A「私がこの学校に入学しようと思った理由として、３年次の科目選択の時に、文系・理系関係なく、受けたい科目を一つの単位として、必修単位数を取るように選択することができるというところに魅力を感じてこの学校を受験しました。他の高校のように文系・理系というふうに明確に分けるというのであれば、１年生で決めなければならないというのは早いと思いました。ただ、この学校のように自分の受けたい科目を選択して勉強していけるのであれば、早くから分かれても良いのではないかと思いました。」

お茶の水女子大学附属高校

A「私は自分では文系に進もうと決めています。しかし私の友人は、文理を高校１年生の冬に決めなければならないそうなのですが、その話の中で友人の口から「とりあえず文系を選んでみた」「＊＊＊が苦手だからとりあえず」のように、「とりあえず」という言葉が時々聞こえます。私は本当に文系に行きたいと思っているのですが、その友人は高校１年生の冬というように時期を限定されてしまっているので、焦って文系にしてしまおうというように軽い気持ちが入ってしまっているのだと思います。それを見て私は不安を感じました。このように時期を決められて焦りの気持ちが出て、「とりあえず」で決めてしまうというところが、文系の「遊んでいる」というようなイメージに繋がってしまっているのではないかと思います。高校３年間の中で、どの時期に文理を分けるかを決めてしまわないで、総合的に見るというこの学校の方針に私は賛成しています。」

四天王寺高等学校

A「私は文系・理系を高校１年生で分けるというのは少し早いと思っていました。私はずっと理系の研究職を目指していましたが、それは漠然としたイメージでしかありませんでした。しかし、高校１年生で文理選択を迫られたことに

よって、本当に私はこのまま理系に進んで良いのかと考える機会にもなりました。早い段階で決めなければならないということで、実際に自分の将来について深く考えるきっかけになる、という見方もできるのではないかと思いました。」

四天王寺高等学校

A「私は理系に行くことを決めています。小さい頃から獣医になりたいと思っていたので理系・文系を決めるにあたって迷わずに決めることができました。しかし、そのとき本当に理系で良いのかな？と考えてみました。私は心理学にも魅力を感じます。それは理系でも目指すことができる学部だからいいのですが、実は民俗学にも少し興味があります。でもそうなると文系じゃないといけないなと考えたりしました。そんな状況で、高校１年生の時点で文系・理系を決めなければならないということになり、色々考えたのですが、高校１年生よりもっと遅い時期に決めることができれば良いということではなく、中学生や小学生というような、もっと早い時期から考える機会があっても良いのではないかと思いました。高校生になって突然与えられて考えるから悩んだり、焦ったり、簡単に決めてしまうというようなことになってしまっているならば、もっと早くから色々な情報や機会を与えられれば良いのかな、と思いました。」

奈良女子大学附属中等教育学校

A「私は歴史が好き・国語が好き・数学が嫌いというような、完全な文系型なのですが、高校１年生のときに悩んでいる友達がいました。やりたいことは理系の学部にあるけど成績的に理系の学部は目指せないということで、結局その友達は文系にしました。しかし今は、文系の学部で興味を持てる学部を見つけたようです。確かに高校１年生で決めるというのは早すぎるとは思いますが、進みたい道が決まっている人にとっては、高校２年生の段階から自分のやりたい科目だけを勉強できるというのは、良いことだと思います。」

司会からお茶の水女子大学附属高校に

Q「ここまでの皆さんの意見の中で、１年生で文理を分けるのは早いけれど将来について考えるキッカケになったという意見がありました。お茶高では他の高校とは違って、３年間文理を強制的に分けられることはない、というとこでしたよね。お茶高の発表の中にも、どのタイミングで文系・理系を選べば良いのかわからないという意見があったと思うのですが、そのことで自分や周りの人が悩んでいる・困っているとか、人からそれについて何かアドバイスをもらったことがあるというようなことは今までにありましたか？」

お茶の水女子大学附属高校

A「普通だったら高校１年生で文系・理系を決めると思うのですが、私自身は文系・理系どころか行きたい大学も決まっていなくて、もはや就職でも良いのでは？と思うくらいで将来を明確には決めていないので、このようなスタンスの学校は私にとってはすごく嬉しいです。私自身はやりたいことが色々ありすぎるので、学外活動をたくさんしています。学生団体の広報班として広報活動を学んだり、ライターとして文章を書く仕事をしたりしているのですが、それで就職したいのかと言われると少し悩みます。このようにいろいろやりたい人はどうしたらいいのですか？と先輩に質問したら、「総合政策学部」がいいのではないかと言われました。それを聞いて、決まっていない人は大学に入ってから決めるというのも一つの選択肢なのかなと思いました。高校で決められない人は総合政策学部に入って、その中でやっぱり自分は文系だったと思ったならその後別の大学の文系の学部に入るという選択肢もあるということを、お茶高にいて思いました。」

お茶の水女子大学附属高校

A「私は大学で何をしたいのかということはまだ分からないので、お茶高のようにいろいろなことを学んで、様々な知識を身につけて視野を広げてから文理選択ができるのはすごく良いなと思っています。じゃあいつ文理選択をするのかと言われるとまだ分からないのですが、自分自身がもっといろいろなことを身につけてから文理の選択ができたら良いな、と思います。」

奈良女子大学附属中等教育学校

A「（参加者の中では）私一人だけ中学３年生なのですが、中学３年生でこれだけ文系・理系に関して考える機会というのは全くありません。私自身は高校１年生で文系・理系を分けることについては賛成なのですが、高校生になって急に文系・理系のどちらを選ぶかと言われても、そんなに急には決められないと思います。中学３年生の時点で、学校側が文系・理系について考えさせる機会を作るべきだと思います。」

四天王寺高等学校

「今のお話を伺っていて思ったことがあります。まず、文系・理系というのがなぜ出来たのかということをこのシンポジウムに向けて調べていたときに、「研究職のように教育にお金がかかる人材は増えすぎるとお金がかかりすぎるので、国がその人数を制限してしまうために文系・理系ができた」というような文章を読みました。そこから考えるのであれば、高校１年生というどんな可能性があるかがほとんど見えていない段階で、「研究ができる人」を、数学ができるかどうかで決めてしまうということは、あまりにも単純ですし、可能性を摘んでしまっているのではないかと思いました。あと、先ほどから「考える機会」をもっと早くに作って欲しいという声があったと思います。私たちは小学校・中学校・高校と通して、完全に決められた教育・授業を全員が受けています。それももちろん基礎学力・基礎的な教養を得るために必要だとは思うのですが、例えば一週間に一時間でも、自由に自分がしたいことをやってみる・その手助けをするような授業があれば、自分が何をしたいのかということは学年が低い段階からでも考えることはできると思います。あと職業の話も出ていますが、今の段階でどのような職業が文系なのか理系なのかということも全く分かっていなくて、将来やりたいことにどのようにつながっていくのかも理解していない状態で、文系・理系という分け方で決めてしまうのはあまりにも安易なのではないかと思います。どのような職業があるのかというような、体系的なことをもっと教えて欲しいなという気持ちがあります。私の意見では、自主的な、自分のやりたいことを探す時間というものを設けた上で、大学でそれに沿った教科を自分で選んで、もっと専門的に勉強できるようにすればいいのではないかなと思います。」

お茶の水女子大学附属高校

Q「これまでの話を聞いていて疑問に思っていることがあります。文系・理系という言葉を皆さん使っているのですが、「文系の科目・理系の科目」ならわかりますが、「自分が文系だ」というような使い方は、どのような意味なのかなと思いました。そもそも文系と理系の分け方は、人によっては数学や理科が好きだから理系だというような言い方もしていますが、私は数学や理科ができるということが理系になるということに繋がるとは思っていません。私のイメージでは、理系は研究したりものを生み出したりすることだと思っているので、数学ができるからといってそのようなことができるとか、数学の研究をするとは思えません。皆さんはそもそも文系と理系をどう考えているのか聞いてみたいです。」

奈良女子大学附属中等教育学校

A「私は先ほど教育の道に進みたいと言いましたが、中学生の時は医者になりたいと思っていました。なので、そのことを考えると自分は理系のはずです。しかし私はすごく数学が苦手なので教科の面から考えると文系の人間ということになってしまいます。そこで中学３年生の間に、自分は何がしたいのか、何をすれば自分の力を引き出せ、社会に貢献できるようになれるのかなということを考えた結果、最終的に教育という道を見つけました。その場合、簡単に形だけみると、文系の人間が文系の道を選んだという結論に至れるような気もします。しかしそうではなくて。将来何をしたいか・何を目指して勉強したいのかという形で文系・理系を選ぶといいのかなと思っています。」

奈良女子大学附属中等教育学校

A「理系科目なら理科とか数学とか、文系科目なら国語とか社会とかを学ぶ機会が学校では設けられています。これらの科目を学んでいて、教科によってはふとした時に「楽しい」「面白い」という気持ちを感じることがあると思います。就職とか進学とかまで考えなくても、自分自身が学んでいて「楽しい」「面白い」と感じていることが、将来したいことにもつながると思います。自分が「楽しい」「面白い」と思えたところから文系・理系を選んでもいいのかなと思いました。」

司会から全体に

「あと残り時間も少しとなりました。ここまでの話を聞いてきて、まだ言い足りていないことがあるという人は是非お話を聞かせてください。」

お茶の水女子大学附属高校

「これまでに何度か「分野」というワードが出てきていたので、それについて考えてみました。私は宇宙関係の仕事に就きたいと思っているので、秋頃に大学の研究室の見学に行って、宇宙工学科の専門の方とお話をしてきました。その時に、宇宙関係の仕事でも例えば航空学とかだけじゃなくて、電子とかもロケットに関わっているという話を聞いて、一つの職業でも色々な関わり方があるということを学びました。宇宙関係の仕事といっても、例えば発信する側だったら文系のほうの分野にやりたいことがあるかもしれません。そのようなことを考えると、文系・理系を選ぶというより、まず「分野」を見てみるという方法もあるのではないかと思いました。」

四天王寺高等学校

「一つ前のお話で、文系・理系をどう考えているかということがありましたが、私は文系的な視点を持っているか理系的な視点を持っているかということで分かれていると思っています。文系と理系の人ですごく視点が違うなと思うことがよくあります。以前見たテレビ番組で面白いと思ったことがあります。そこでは文系・理系両方の大学院生が集まっていて、BSE、狂牛病の問題について話し合っていました。ある理系の人は科学者の立場でそのリスクについて話されていました。またある文系の人は行政の立場で、消費者と牛肉の業者の両方のことを考えて発言されていて、視点が全然違うのだと勉強になりました。」

お茶の水女子大学附属高校

「先ほど職業についてもっと学校側から教えて欲しいという意見がありました。この前学校で職業適性診断をしたときに、そこに色々な職業をかいてあったのですが、そこにあるのは本当にごく一部の職業で、さらに文系・理系に分けることができるような職業ばかりだったと思います。でも世の中にはもっとたくさんの職業があると思います。大学では、職業教育は専門学校や医学部で学ぶけれどそれ以外の大学は基本的には教養教育がメインであると思うので、

職業から文系・理系を考えたいと思っているのであれば学校側に教えを請うのではなくて、学生団体による職業体験のイベントや、他にも色々な場所に自分から参加したら良いと思います。みんながそのような体験をいろいろしてからこのシンポジウムを開いたとしたら、もっと違う意見が聞けたのかなと思いました。」

高校生の感想

プール学院高等学校

『今回の奈良女シンポジウムへの参加と準備にあたって、たくさん自分の中で「すごい」、「そんな考えがあったのか！」という肯定的な気持ちよりも正直「悔しい」という気持ちの方が大きかったです。しかし今までの私であれば周りの友達や両親等に注意をされてから反省点に気付くことが多かったのですが、シンポジウムの帰り道では、自分なりに反省点を考えていました。また今回は他校の方々と意見交換をしている時、相手側の方の話している内容の中に自分が今後していきたいヒントになるようなことが多く、本番中何度も学年の書いてあるパンフレットを見て本当に同い年なのかと思ってしまう程、刺激的な体験でした。初めの私は、シンポジウムのテーマであった「文系・理系」をわざわざ分けることに対して、根本的に否定的な考えしか持っていなく、自分たちで準備したテーマを興味のある海外の教育にしました。本番では、他校の方々も海外の教育について取り上げていて、その場でのアンケートでも海外の大学に良い印象を持っている方々は半数以上いました。しかし、意見交換の際、皆さん「文系・理系」に対してもしっかりとした意見と考えを持っており、自分の中での関心度は低くても多角的な意見と資料を元に、意見交換の時にクリアな発表をしている姿を見たことが、私にとって新しい発見であり素晴らしいと思ったところです。

今回の参加をきっかけにたくさんの学校の方とこれからもっと１角議題についてトコトン自分たちの考えを話し合い、自分に無いものを持っている方々から色々なものを吸収したいなと思いました。

このような機会を与えてくださった先生方、ありがとうございました。』

『奈良女子大のシンポジウムが始まって、すごく厳かな雰囲気だったので、私達の番がすごく心配でした。案の定、私達の時の最初の笑いどころが微妙だったので怖かったです。しかし、次のところは大成功し雰囲気も緩んで嬉しかったです。他の高校の人達は、私達と同じくらいの歳なのにすごく深くまで考えていることに驚きました。意見を交わすとき、私は全然発言が出来なかったのが悔しかったです。具体的に言うと、質問があっても他の人の意見を聞いている間にどんな質問だったかを忘れてしまっていたのと、語彙力が足りなくて

たまに何を言っているのかが分からなくなることです。頭の整理をもっとしていってから挑めばよかったと思いました。後半、たくさんの意見が出て盛り上がったので良かったです。

私がこの経験で一番気になったのは、ある大学の先生が言っていたことです。

「学びたいことを学ぶために勉強するのか。それとも、目標のために勉強するのか」

この議論は難しいのでやめとこうと言っていたけど、私はそのことについて話をしてみたいと感じました。なぜなら、私もそのことについて思うところがあるからです。』

『私は今回のシンポジウムで、もう一度文系と理系について深く考えることが出来ました。「理系、文系の選択でまだ納得していない人は？」という質問のときに言いましたが、私が将来の職業とは違い、大学受験のためだけに理系を選択したということに今すごく反省しています。その意見に訂正を入れてくださったのが、奈良女の高２の男子生徒です。職業のために文系と理系を決め、勉強しないといけないことが分かりました。しかし、もう腹をくくって理系で頑張りたいと思います。

今回の反省点は、あまり発言ができなかったことです。もっと詳しく理系・文系のことについて調べておく必要があったことと、調べたことに対して自分の意見をしっかり持つことは大事だなと思いました。他の学校の人は自分の意見をすごく持っていて、圧倒されてばかりいました。しかし、沢山勉強出来たこともありとても楽しかったので良かったです。

また機会があれば、講義やディスカッションに参加し、自分の意見を持てるように準備をして沢山の人とやり取りができるようにしたいです。』

『私はこの企画に参加してたくさんのことを学び経験しました。なぜなら、発表するまでにみんなでアンケートをとったり、意見を持ち寄ったりして、協力する気持ちやどのように調査することが最善かを考えることができたからです。

そして、実際に奈良女子大学で意見交換をしたときには、他の３校の人たち

の文理選択に関する考えがとてもしっかりしていて、自分以外の人達がどのように感じているかがわかっておもしろかったです。
　最後には、「大学入試の制度まで変えるべきではないか」などの大きな話になり、私達のこのシンポジウムで話した内容によって、未来が変わるのかなと、変わればいいなと思いました。』

『すごくおもしろかったです。自分たちとは全く違う考え方をする人達の意見や質問を聞いていると、「そんな所にも注目できるんだ！」と思いました。
　自分が予想していたシンポジウムは、緊張感あふれるものだと思っていましたが、実際はちょっとした緊張感はあるものの、結構和んだような感じでした。
　いよいよ意見交換になると、更に周りの学校のすごさが分かりました。
　まず驚いたのは情報処理の速さです。誰かが質問すると、私の場合、自分の意見を頭の中でまとめるのに精一杯なのに、他の学校の人は、その質問の答えを準備していた日のようにスラスラと答えていたのに驚きました。
　それにどの質問も解答もその時その時の話題にあっていて、「よく話がそれたりすることもせずに話せるな」と感心してしまいました。
　次に驚いたのは積極性です。プールの人達は、多分言いたいことはあったけど、あの場の緊張感に負けて手を挙げられなかったのだと思います。だから電車の中で「悔しいなー」と言っている人もいました。奈良女子の男の子４人も、女の子ばっかりのところであんなに発言できるのはすごいと思いました。
　意見交換の時の内容はすごく気になる内容ばかりでした。
　大学の先生から「どんな試験問題がいいか？」などときかれたりして、おもしろかったです。いつも自分たちが普段仲間内で言っていることが直接的に言えることは貴重だったと思いました。
　でも参加者のみんながまだまだ言いたいことがあるって感じだったので、「どんだけしゃべることあんねん！」って思いました。
　今回のシンポジウムは初体験のことばっかりで、言いたいことを言うことができなかったので、次、このような機会があればもっと男女の比を同じくらいにしてやってみたいと思いました。』

『しっかりメモしていなかったのとうまく頭の中でまとまっていなかったので、きちんと言えなかったのが、すごく心残りです。あまりにも短い１時間半でした。もっと時間が欲しかったです。もし、もう一度機会があるのなら、もっと私の中で話の整理をして、色々と下調べをして、その機会に臨みたいと思います。反省点も多々ありますが、とても良い経験をさせて頂きました。

同い年の人がほとんどなのに、とても圧倒されました。豊富な知識量と素早い情報処理能力。到底かなわないなと痛感させられました。やはり、先程も言ったように、下調べが足りませんでした。甘く見ていたようで申し訳ないです。

きちんと下調べなどして、将来同じ立場に立てるように頑張ろうと思いました。

テーマが曖昧だったこともあり、すごく難しかったです。また、ご機会をいただけたのがすごく嬉しいです。今度こそもっと頑張りたいです。』

『私がこのシンポジウムに参加して思ったことがあります。１つは、どの高校も考えていることは近くて、自分たちの意見と似ているなと思いました。文系・理系のイメージはどの学校もほぼ同じだったので、多くの高校生はそういうイメージを持っているんだなと思いました。

四天王寺の発表で、海外では授業は「知識をアウトプットする場」と言っていたので、日本とは違うなと思いました。もう１つは、お茶高は文理をわけずに文理科目をすべて行うということについてはとても驚きました。私は、文理を分けるのが当たり前だと思っていたので、とてもおもしろいなと思いました。お茶高の、文理を１年で分けてしまうのはもったいないという意見に私も同感です。でも奈良女の、１年で文理選択をすることによって自分のことについて考えるキッカケになるという意見もそうなのかもしれないなと思いました。

あと、宇宙関係の仕事につきたい人が文理選択をするより分野を選んだ方がいいという意見もそうだなと思いました。

最後に、ディスカッションのときに他校のひとがいっぱい意見を言っているのを聞いて、こんなに意見をはっきり言えるのはすごいと思いました。ディスカッションの時に質問されるかもしれないところについては考えていなかったので、考えておくべきだったと思いました。私はディスカッションの時に他校の人に圧倒されて意見を言えなかったので、もっと積極的に意見を言おうと思いました。』

四天王寺高等学校

『私は今まで海外の友人と、海外や日本の教育制度の違いやそれぞれのメリット・デメリットについて話し合ったことはあったものの、そもそも理系・文系という枠組みがなぜできたのか、理系・文系に代わる教育制度という、より深く大事な問題についてあまり深く考えたことがありませんでした。今回、高校生シンポジウムに参加させていただくにあたって、そのような深い問題について考え始めて、改めて自分の無知を思い知らされました。

私は理系・文系という分け方をしないほうが良いと思っていたのですが、実際に高校生シンポジウムに参加させていただき、私とは異なる視点から、理系・文系という枠組みを肯定的に見る意見に触れることができて、自分の考えにもう一度疑問を持つことができました。多角的な視点から理系・文系について考え、自分の意見を見つめ直す良い機会になりました。最後になりましたが、奈良女子大学附属中等教育学校・お茶の水女子大学附属高校・プール学院高校の皆さん、そして高校生シンポジウムを企画してくださった先生方、本当に有難うございました。大変貴重な経験になりました。』

『私はシンポジウムで様々な考えの人に出会えたと思います。初めはテーマが理系・文系だと聞いたとき、あまりにざっくりとしすぎてどうなるのか見当もつきませんでした。しかし議論が始まると、たくさんの意見が飛び交ってとても楽しく刺激になりました。ただ、私は自分の意見を全然言えなかったので、たとえ挙手制であったとしてもひるまずに自分の考えを的確な言葉で表現できるようにならなければならないと心の底から感じました。私は理系・文系という選択を高校１年生でしなければならないというのは、可能性を狭めてしまうのではないかと思います。例えば高校１年生で理系と決めてしまうと、その時点で弁護士になるという道は閉ざされてしまいます。もちろん、文系に移ることも可能ですが、受験があるためなかなかできません。そのようなことから、海外の自由な制度に憧れていました。ですが、シンポジウムで出た、もっと早い段階から仕事や進路のことを考えるきっかけを与えれば良いのではないか、という意見はとても良いと思いました。私としては、どの学部がどのような仕事に関わっているのかを自分を含めみんなも知らないから、級に進路を考えろと言われても戸惑ってしまうのだと思っていたので、早い段階から関わらせる

ことで悩むことも減ってくると思います。
　シンポジウムに行って１つ明確になったことは、ほとんどの人が進路に悩んでいるということです。このシンポジウムをきっかけに、広い視野を持って、自分がどのよう名仕事に就きたいか、真剣に考えようと思います。理系・文系を話し合う機会を作っていただいてありがとうございました。』

　『私はシンポジウム、それ以前に他校の方々との意見交換の場に参加すること自体初めてでした。なので、とても緊張していたのですが、他校の発表や全体での意見交換など大変楽しむことができました。今回のシンポジウムのテーマである文系・理系と区別することのメリット・デメリットについて、私は今まで深く考えたことがなかったので、自分で考える良い機会になりました。意見交換ではどの方の意見も一理あり、考えさせられるものや、自分の視点とは違った意見があり、大変刺激を受けました。
　私たちにシンポジウムに参加させて頂く機会を作ってくださり、本当にありがとうございました。』

　『私は今回のシンポジウムで、様々なことを学ばせていただきました。
　私には以前まで文系・理系について深く考える機会がありませんでした。文理選択をせまられたときの私の進路はほぼ決まっており、理系に進もうという強い意思があったので迷わず理系を選ぶことができました。
　しかし、このシンポジウムで文系・理系について調べたり討論したりことによって、文系理系を選ぶことの難しさや、文系・理系の存在意義について深く考えることができました。
　私は今の文系・理系の制度よりも更に良い制度として、選択科目制度を推薦したいです。これまで文理選択で迷っていた人も、この選択科目制度によって文系・理系の両方を選ぶことができ、また私のように文系・理系が決まっている人にとってもきちんと文理選択ができるからです。
　そして、私は大学へ進学するときや社会へ進出するときのことを考えた授業、例えばディスカッションやプレゼンテーションの授業を、今の教育に、更に取り入れていくべきだと思いました。
　今回のシンポジウムで、討論を通して同世代の様々な考えをしることができて嬉しかったです。このような機会を設けていただきありがとうございました。』

『文理選択は何のためにあるのか。

以前なら思いつきもしなかったこの問に気づき、考える場を作ってくださった、奈良女子大学附属中等教育学校・プール学院高校・お茶の水女子大学附属高校の皆さん、そしてこのシンポジウムを企画してくださった方々、本当にありがとうございました。事前に考えていた文理に対する私の意見は、シンポジウムの間、たくさんの私とは違う視点からの意見を聞いて二転三転し、曖昧だったビジョンが、まるで霧が晴れるように、少しずつはっきりしていきました。

私は文系・理系という区分は必要ないと思います。

文理選択を高校１年生という早い段階で決定することには大きく３つの不安要素があります。ひとつ目は、受験戦争の激しい日本において、「大学受験のための勉強」という傾向に拍車をかける危険があるということです。事実、「〇〇の教科は選択しないから勉強しない」という声をよく耳にします。しかし、ゴールを受験のずっと先においたとき、寄り道のない最短コースはあまりにも無味乾燥ではないでしょうか。ふたつ目は、知識や考え方に偏りができ、多角的な物の見方ができなくなることです。ダヴィンチが万能の天才であったり、過去の優れた哲学者がよく、同時に優れた数学者や物理学者などであったりしたように、文系と理系の間には本来、壁など作るべきではないのです。最後は、後で後悔しないか 不安が残ることです。

一方、文理選択の利点に将来を考えるきっかけになることが挙げられました。確かに渡しも文理選択にあたり、将来の夢をより現実的に考えるようになりました。しかし、その家庭で自分の知る職業の幅がとても狭いことを知りました。どのような力がどの職業に求められているのかもほとんど分かりません。これが「後でもっと自分にむいた道を見つけて後悔しないか」という不安の種ではないでしょうか。

以上をふまえて私が考えたのは、「自分が好きなことを自ら学ぶ授業を導入すること」です。この授業では、はじめに教師がさまざまな職業とそれに繋がる道を体系的に示します。それ以降は、児童、生徒が自主的に自分のやりたいことを学び、教師はあくまで受動的に、それを伸ばす手助けをします。この授業を導入することで、生徒は自主的で独創的な学習ができ、また実際に試しながら将来を考えることになり、将来への不安も減ると思います。さらにこの授業における評価を大学受験にも反映させることで、文系・理系の隔てなしに、自分にあった学部を選ぶことができ、大学側は生徒の独創性や意欲も考慮でき

るようになります。

今回のシンポジウムを通して、私は何気なく過ごす日々の中の出来事に、一度疑問符を投げかける重要性を知りました。自分の意見をはっきりと持ち、時代や周囲に流されない様にするには、まず問題意識が必要なのだと痛感しました。また考えることやアイデアを言葉にすることは難しい反面、だからこそ、とても楽しかったです。このような素晴らしいシンポジウムに参加でき、心から嬉しく思います。ありがとうございました。』

奈良女子大学附属中等教育学校

『私は文系か理系か選択するとき、深く悩むということはなかった。昔から理科的なことの方が社会や国語よりも好きだったからである。今回改めて文理選択について、深く考えることができたように思う。

文系と理系に関するイメージについてはしっかりと考えたことがなかった。アンケートの調査結果などは、どの調査にも似たような傾向がありおもしろいと感じた。理系のイメージの方が、「硬い」「理詰め」などといった傾向があるのは、試験管を持ち研究するというような、象徴的な研究者の姿が反映されているようにも思う。

シンポジウム内では何度か発言した。文系、理系と別々のことを学習しているが、大切なのは学んだその先に何を描くか、ということだという主張をしたように記憶している。高校の時に理系で数学や理科に秀でていたとしても、たとえば世界史の知識などが、他国の人と関わるときに必要不可欠になるだろう。今まで学んだこともちろん大切だが、学び取ろうという好奇心、積極性を持ち続けていくこともまた大切なのではないか。自分が学びとったことを生かし、社会で活躍することができればいいのではないかと感じた。』

『普通の中学生は高校入試を経て高校へ入るわけだが、高校を選ぶ理由の一つにその学校のカリキュラムなど大学受験との関係を見て選ぶはずだ。つまり、大学につながる進路について考えなければならない機会が訪れる。私の学校は中高一貫で、かつ高校に上がる際に試験がない。中学を決める際に大学受験を見据えているわけでもないし、必要に迫られないと物事をそんなに深刻に考えない私は、中 3 や高 1 で進路についてほとんど考えることがなかった。それに対し、今回のシンポジウムに参加していた他の学校の生徒は、全員高校入試で入ったか高校に上がる際に試験がある高校の 1 年生だったため、進路や文理について日ごろからよく考えているのだなと感じた。しかし、その中で高校入試、文理選択と大きな節目が短いスパンで訪れるためか、文理選択が早いと主張する人がたくさんいた。私はその話を聞いているなかで、選択までに時間の猶予を作ることは必ずしもいいことであるとは思えなかった。期限が伸びるとその分を有効に使うのではなく、無駄に過ごしてしまう私のような人が出てくると思うからだ。そして、文理融合を新しい選択として加えるべきではないかとい

う人も多くいた。提案をする際には、文系理系のイメージやその分け方の問題点だけでなく、良いところ悪いところ合わせて全体の状況を分析し、把握してから考えてしまう私にとって、彼女たちが感じたこと、経験したことから直接的に結論を出していたのが新鮮だった。「文系・理系とは」というテーマは教育全体の大きなテーマのように思える。しかし、全体での意見交換の中では文系

理系に直接関係すること以外にも、大学入試の方法や学ぶ目的や意味にまで発展していた。文理という大きなテーマについて考えているようで、自分の進路や自分にとって学ぶことの意味を考えることにもつながるのだと感じた。』

『自分はすでに理系と決まっている立場で参加させてもらった。この会を通して素直に思ったこととして、理系か文系かで悩み、不満や意見を持っている人がたくさんいるということである。一番多かった意見として、「高１に時点で文理を選択するのは早すぎる」、「自分に納得の行かないまま選択し、後から変えようと思ってもなかなか難しい」などだ。このことに対して自分の意見をのべたい。単に自分に素直になれないのではないか、僕はそう思う。高校１年生までに、自分が楽しい、面白いと思ったこと、またそういう感情がおこらなかったとしても学校で様々な教科を学習していれば何か興味を持ったことがあるはずである。そういうものに目を向けずして、大学の学部などを見て悩むのは少し違う気がする。そういうものを参考にして文理を決めれば、高校３年制の途中で文理選択を変えるなんてことはなくなるはずである。

しかし文理選択のことを高校１年生になってから考えなければならないという今の進路教育は見直さなければならないと思う。もっと前もって中学のうちから考えるようにすればもっと文理の問題はスムーズに解決されていくのではないだろうか。』

『私は、自分が理系科目を苦手と感じることや、それによって文系を選択することに何の不満も持ったことがなかったので、文理選択について悩んでいたり、システムそのものに対して不満を持ったりしている人がこんなにいるのか、ということがまず驚きだった。また、私は、中高一貫校にいることで、文理選択や職業などについて知ったり考えたりする機会が、中学生のうちから多くあったように思う。しかし今回のシンポジウムでも、「中学生のうちから文理に

ついて考える機会があると良い」という意見が出たように、高校受験を経て高校に入学し、大学進学について考える人達にとっては、文理をその短い期間で選ぶのは難しいことなのかもしれないなあと思った。

自分が文理選択に関して日頃から疑問を持ったり、深く考えたりすることがなかったからこそ、自分とは違う考えを持っている人や、違う学校に通い、違う生活をしている人達の意見を聞くことができ、有意義な時間だった。「文系」「理系」を、人を区別するカテゴリーにするのではなく、たとえば、テストの選択問題を選ぶような感覚で、受験のための手段としてみんなが割りきって考えられるようになれば良いのではと思う。学問が多様化、細分化しているから、文理選択が受験をする上で必要だとしても、それに縛られるようなことはなくなるのではないか。』

『私が今回のシンポジウムを通して考えさせられたことがあります。今回触れることは私が驚いたことです。今回のシンポジウムでは、同じ中高一貫の学校に通う生徒でも、歳が１つ下の人が多かったとはいえ、「自分は将来の目標がない」と言った発言を度々耳にしました。私は将来の目標を４年かけて見つけたのですが、それも情報を自分で探し求めたり、学校のプログラムや授業の中で見つけたりしたことです。後者の２津に関してはどうしても受け身勝ちで運の要素も含むので、今回は前者について話します。

世の中のほとんどの高校生が自分の力で探すことを求められます。それは自分のことなので当然なのですが、「一人で自分の人生を決める」ということは高校生には早すぎると思いました。学校での授業や生活のおかげで社会について知っていますが、実際社会に出たことのない私たちが自分で「自分が社会でどう生きていくのか」を決めるには限界があると感じたのです。つまり何が言いたいかというと、周りの人達のサポートが重要だということです。保護者や先生という立場だけでなく、一社会人として子ども達を導く必要があると思うのですが、残念ながら今のところ各家庭、各生徒によって情報がまばらで、情報を多く持たないものは「いつの間にか」全てが終わっている可能性すらあります。

一般的に自分から探そうとしないものは「やるきがないからいい」や「どうせ出来ない」などと烙印を押され放おっておかれます。確かに本当にそうである人もいます。しかし「探そうともしない」それだけで全てを決めるのはあま

りに悲しすぎます。「諦めた」から「諦める」と言うのは、「生徒が諦めたから諦める」だけでなく「生徒が諦めたから諦める」だけでなく「周囲の人間が諦めたから諦める」ということもあり得る文章です。総合すると、今必要なのは「人生」を考えることだと思います。』

お茶の水女子大学附属高校

『私は、今回理系や文系、進路について考える会だと聞いてこのシンポジウムに参加しました。私は、高校受験の際に理系に特化した高校に進もうかということも考えたことがあったので、理系や文系とはなんだろう、また私はどんな道に進みたいのだろうということを悩んでいました。「理系の知識や能力を持った文系」になりたいと考えたこともありましたが、結局このお茶高に通う中で振り出しに戻ったように感じていました。そんな中で、今回このシンポジウムで同学年の友達、他校の皆さんのお話を聞けたことはとても意義のあることだったと思っています。

今回特に印象に残ったのは日本の大学、高校の制度が海外とはぜんぜん違うということです。私は、自分自身で質問もしましたが、文系と理系の概念そのものが曖昧なものだと感じています。私の考えでは、文系と理系の違いは考え方、また一つの問題へのアプローチの仕方なのではないかと思っています。しかし、実際には教科や分野といったもので分離が分けられているというように感じました。一方、海外では高校でも自分の学びたいことを学ぶことができ、大学ではそもそも文理という概念が存在しないという話を聞いて、とってもシンプルで分かりやすいし、本当の意味での自主性や個性というものが尊重されているように感じました。ただ、今から急にその制度を取り入れることになったとしても自分自身で決められるという自信はあまりありません。「自分で決める」ということや、「一からアイデアを出す」ということがとても難しいことのように私には感じています。

また、いろいろな人の話を聞く中で、納得できるものや、できないもの、私が考えたことのない発想がたくさんあり、もう少し話を聞いてみたいと思う人がたくさんいました。話題がどんどん変わっていったからこそ聞けたたくさんの話もありますが、一つの話題を少人数でディベートするということもできたら面白かっただろうと思います。』

『このシンポジウムで最も印象的だったのは、どの高校の生徒さんも活発に意見交換をしていたことだ。「文系・理系とは」という抽象的で難しい議題だったが、誰かが質問すると大人数で答えるという流れがあり、議論をしていて

楽しかった。お茶高だけ会場が違うということが少し寂しかったけれど、普段会話する機会のない西日本の方々と話せたことはとても良い経験になった。

私自身、理系に進むという予定でいたけれど、そもそも「文系・理系」の定義は何か、といった話題や文理選択の時期などについて話し合うことで、改めて自分の進路を考えるきっかけにつながったと思う。ただ、文系・理系を科目の得意・不得意ではなく自分のやりたいことから逆算して決めるべきだという前から持っていた意見は変わらなかった。私の中学時代の友人が、将来の夢がなく進路希望をどのようにすべきかわからず悩んでいると言っていた。そのような人は他にもたくさんいると思うので、このシンポジウムを見ていただきたいと感じた。』

『私はお茶高に入学するまでだけでなく、お茶高に入学してからも文系理系について深く考えたことはなかった。しかし漠然と、ただ自分が好きだからという理由で文系志望だった。今回のシンポジウムに参加できたことや、私の高校が高校３年生までは文理選択がないという特別な枠組みであることにとても感謝したと思う。シンポジウム内で出ていた「とりあえず文系」にならなくて済んだ。まず、始めの準備段階にあたっては、文系理系のイメージを調べた。学年全体でアンケートをとったのだが、その結果に私はまず安心をした。私以外にもたくさんの人たちが文理について不安を持っているのか！と。持っている不安も似たようなものが多く、私たちがその代表としてその不安を共有できたらいいなと思っていた。当日を迎えてみると相手校は見知らぬ顔しかおらず、全員が頭良く見えて、文理選択について自分のついていけないような話になるのではないかと思っていたが、彼らの多くはすでに文理選択を終えていて、その人たちの考えを聞けることが新鮮だった。私は将来教員になりたいと考えており、教員といっても私がなりたいのは小学校の教員であった。正直、文理のどちらかがとても劣っていたらいけないから、もしそのような人がいたら意見を聞きたいと思っていた。すると一人、教員志望の人がいて、自分の将来のビジョンを明確にわかっているようにお話していた。内容もしっかりとしていたし、何よりも、今の自分に文理選択を終えた後に自分の将来像がはっきりとすはないなと実感させられた。目先の文理選択のことだけを考えるのではなく、その先に何があるのかを考えなければならないと思った。まだ、今の私は文系

志望なのか理系志望なのか決められていない。しかしそんなに急ぐことでも、私たちの学校のカリキュラムからは、ないと思われるので、ゆっくりと今回のシポジウムを大いに参考にして決めていきたい。文理のシンポジウムに参加できてよかった。』

『シンポジウムを通して、今まであまり考えたことがなかった文系・理系の枠組みについて理解を深め、大学制度のあり方を考えることができたと感じました。また、今回のシンポジウムは私たちの将来を決めていく上で非常に貴重で有効な機会であり、私もこれを機に文理についてもっと知識を増やして今後の役に立てたいと感じました。

今まで私は進学する大学のこと、文理選択についてあまり現実的なことに感じられず、フワフワとしてしか考えていませんでした。しかし、このシンポジウムのために同じ学校の人がどう考えているか聞いたり、シンポジウムで同世代の人が文理をどのように考え、これからの大学制度がどうあるべきだと考えているのか、ということを聞くことができました。その経験によって、大学などのことについて自分でも現実性を感じ、考えていくことができました。

この会を行ったことで、これからの大学とは、文系・理系でこだわるというよりも、文理融合など、形をこだわらない形にしていく必要があると感じました。また、文理選択について私のように。あまり現実味を帯びていないように感じている人も多いと思うので、このような会が広がっていけば良いと思いました。』

『このシンポジウムを終えて、やはり文理融合型はオールマイティーであると感じました。文系、理系双方の視点を持つことは将来大人になったときに一つの物事に対し偏った考えをすることを防ぐことができると思います。また、「理系の世界しか知らない、文系は一体どのようなことをするのだろうか」などと、文理間の見えない境界を取り除き、お互いの交流や意見交換を活発にさせるのではないでしょうか。高校生という、まだ成長するような家庭の私たちが、早くから一つの世界、考え方に閉じこもってしまうのは自分自身の持つ可能性を有効に活用できなくなってしまうのではないかと思います。今の文系・理系の違いを強調するのは少しずつやめ、文理融合をするように意識を変える

べきではないでしょうか。

　シンポジウム内ではまとまりきらなかったのでここで述べ直します。私が言いたかった ”とりあえず” というのは、文理を機会的に選択してしまっている、というものです。その代表的なものが「数学が苦手だから文系」です。私も文系志望ですが、志望理由は苦手教科を優先したものではなく、大学で行きたい学部、将来進みたい分野がそちらだったからであり、「とりあえず」機会的に選択した人とは少し違うと思います。同じような目的を持ったからには、互いの理解も必要だとは思いますが、やはり「ゆるい文系」と一括りにされるのは少々気が引けるものです。みんなが焦らず根拠を持って選択することが第一だと思います。』

『私は自身の文理選択に迷っていたため、このシンポジウムへの参加を決めました。文系・理系とは何かということ、また早期の文理選択の是非について複数の視点から考えることができました。校内の話し合いでは文系・理系のイメージなど、比較的身近なトピックについて深く考え、私自身の文理選択について考え直すきっかけにもなりました。一方で他校や大学の先生方を交えたシンポジウムでは予想していたより話が大きくなり、文系理系や大学入試制度のあるべき姿についての意見交換が主だったように思われます。もちろん長いスパンで考えれば高校生によるより良い大学入試制度へ向けた話し合いも重要になってくると思いますが、高校２年生への進学を目前に控えた今は焦りもあるせいか、もう少し身近な文理についての話の方が（私には）得られるものが多かったのではないか、と考えてしまいます。今回のシンポジウムを通して私の文系・理系に対する考え方にこれといった大きな変化はありませんでしたが、また時間をかけて自身の文理選択について考えよう、と思うようになりました。貴重な体験をさせていただけて、嬉しかったです。ありがとうございました。』

『お茶高は理系・文系を分けないため進路を考える貴重な機会になりました。他の学校の文理の分け方や文理に対する考え方も聞くことができ、様々な視点から文理を見つめ直すことができました。』

『私は理系の道に進みたいと思っている。今回のシンポジウムで、アンケートをとった時に、まだ文系か理系か決めることができていないという人が多かった。お茶高は高校３年生で分かれるが、奈良女やプール学院、四天王寺は１年生の時点でどちらにするか決めて、２年生から別れなければならないという。じっくりと将来の道を考える時間もないため、「とりあえず」や「数学が好きだから」などの理由にもならないような理由によって文理選択をしてしまう人も多いとこのシンポジウムでよく分かった。プール学院と四天王寺の方達は、国際的な文理選択について話していて、大学で文理を分ける、高校の段階で分けられることはほぼないという。また、フィンランドの例で「尽きることのない独創性を生む」というのを聞いた。確かに理系文系を高校という早い段階で分けることで、狭く深く掘り下げることができる。しかし広い教養を得ることができなくなってしまう。なので、私はフィンランドの例に強く共感をした。奈良女の方は、自分自身で自分は文系だから、理系だから、という考えにとらわれず、文理関係なく学んでみるのが重要だと言っていた。今回、このシンポジウムに参加して感じたことは２つある。１つ目は、プール学院の方が言っていたことだが、高校は理系文系を決める３年間にしたい、ということ。今回のプレゼンを聞き、このような考えが深まった。２つ目は、全体での意見交換において、ほぼ全員が意見を述べたり、質問をしたりしていたことに関して、とても真剣に取り組んでいて、それぞれの考えが聞けてよかった。普段、他校の方と話し合いをすることがないので、とても貴重な経験になった。また、テレビ会議の難しさを知った。』

『奈良女、プール学院、四天王寺高校の皆さんと討論ができ、とても貴重な体験になりました。高校に入って、大学受験や将来のことを考えるために、文系・理系について悩むことが増えました。私は将来的に、今のところは理系に進もうと思っているのですが、今回の討論でそもそも文理分かれる必要はあるのか、それぞれどんなイメージがあるのか、など文理選択というありがちなテーマではなく根本を追求できた気がしました。私は、高校のうちに文理選択をする必要は無いと思いました。確かに文系理系どちらの教科も網羅するのは時

間も労力も使いとても大変です。（実際お茶高がそうだから。）しかし、たとえ将来の夢が決まっていたとしても、文理とらわれず、様々な勉強をすることで、多様な道が見えて来ることを、お茶高に入って実感しました。また、将来があまり見えていない時期に文理選択の期限がせまって、慌てて決めて後悔するということは避けたいと思ったし、仮にそれで決まっても、自分の将来を考えたときに全く意味が無いものになってしまうのではないかと思いました。文理分かれる学校を否定するつもりはありませんが、今の高校の教育を見て、私個人として、そう感じました。それに対し、社会に出てからは文理という概念も必要になってくるのではないかと思います。それは社会のステレオタイプを植え付けるという意味ではなく、文理別れた方が、仕事や何かの作業をするときに、文理それぞれの良いところを生かし、調和できるのではないかと思うからです。“文系は遊んでそう”、“理系はガリ勉ばかり”みたいな偏見ではなく、文理を人の個性・特性として捉え、良い方向に使い、協調していくことが大切なのではないかと思いました。文理について、あらためて考え、見つめ直す、良いきっかけとなりました。』

高校生シンポジウムを終えて

高校生シンポジウムを通して、高校生たちから本当に様々な意見を聞くことができました。全体での意見交換も最初はみなさん緊張していたようですが、後半にはたくさんの意見が出て非常に盛り上がりました。

今季あのシンポジウムの中で、高校生が文系・理系を選ぶ際の基準として、各教科の得意不得意や好き嫌い・なりたい職業とのつながり・社会貢献するための手段などを考えるという意見が出ました。しかしそれらを基準に文理を選択したとしても、自分の選択に満足できていない人が実はたくさんいるということが今回の高校生シンポジウムを通して分かりました。また、みなさんが文理を決める際の基準の中にある「職業」についても、おそらく自分の知らない職業が世の中にはたくさんあるのだろうという不安の声があがりました。今回の高校生シンポジウムでも、文系の職業としては接客業・営業職・弁護士・語学関係・公務員・総務・法律関係などが、理系の職業としては医療関係・研究職などがあがっていましたが、実際にはもっと細かく分かれた様々な職業があるはずです。たしかに何が文系・理系の職業なのかという話になると、非常に限られた、みんながよく知っている代表的な職業しか出てこないのかもしれません。これに対してはいくつか具体的な提案があがりました。簡単にまとめると「高校生で文理を分ける時期が来るまでに、どのような学問・職業があるのかについて自らよく調べ・考えておく必要がある」ということでした。高校生という段階では社会人として働く経験がないことはもちろん、アルバイトすらも未経験な人も多いので、職業や社会について知っていることは非常に限られています。そのような中で高校生が自ら進路を考え後悔のない選択をするために、進路選択の際にどのようなことを考えるべきなのか、どのようにして情報を集めたら良いのかなどということについて考え・知る機会が、全ての高校生に与えられるべきなのではないかと思います。

これに関連して、高校生シンポジウムで出た意見の中で、世の中には非常にたくさんの学問・職業があるので簡単に思いつく代表的なものだけを知っておくのではなく、もっと体系的なことまで知りたいという意見もありました。そのために、小学校・中学校の段階から、それらのことについて考える機会があれば良いのではないか、という提案がありましたがこれは非常に現実的な、実現可能な提案なのではないかと感じました。

例えば、学問・職業についてある程度の体系的なことを教員が提示し、それ以上は生徒個人が自らの興味に合わせて、それぞれどのような将来に繋がる可能性があるのかを自由に考え・調べてみるというような形が考えられます。おそらく学年や個人の興味によってどのような物を調べるのかは様々であるとは思いますが、そのことでどんな進路選択の可能性があるのかを自然に考える事に繋がるのではないかと思います。もちろん自分が調べたものだけではなく、友人が調べたものが自分自身の進路選択のヒントになることもあるでしょう。そのような機会を設けることで、生徒だけではなく、教員にとってもたくさんの進路の可能性を知る機会になるのではないでしょうか。

今回のシンポジウムの中で私が特に気になったのは、自分がした（もしくはこれからするであろう）文理選択に、完全には納得が出来ていないという人が会場の約半数はいたということです。もしも一般に高校生全体でも同じような割合で自分の文理選択が納得出来ていないという人がいるのならば、その原因を探り、解決策を考えていく必要があると思います。そうすることによって、現在の高校・大学における教育において不足していることが見えてくるのではないでしょうか。

船越紫

LADy SCIENCE BOOKLET 11

文系・理系をどう考えるか

2016 年 3 月 15 日発行

奈良女子大学　理系女性教育開発共同機構

CORE of STEM

Collaborative Organization for Research in women's Education of

Science, Technology, Engineering, and Mathematics

〒630-8506　奈良市北魚屋東町

コラボレーションセンター　Z207

TEL.&FAX 0742-20-3266

ladyscience@cc.nara-wu.ac.jp